

消毒ボトル押しにくい／加湿器洗浄が手間

看護師さんの「困りごと」企業に伝えます

川崎市、県立保健福祉大調査受け解決策探る

感染管理が専門の看護師たちが、職場での様々な「困りごと」をインタビュー形式で聞き取った調査結果がまとまった。川崎市は、浮かび上がった課題を集約した上で企業などに知ってもらい、新しい機器やシステムの開発など解決策につなげようとしている。

調査は昨年12月と今年1月、県立保健福祉大学の実践教育センターとヘルスイノベーションスクールが行った。同センターで研修中の20〜50代の看護師延べ13人が互いにインタビューする形で、通常業務で何に困っているのか話し合った。

調査から看護師が抱える悩みが見えてきた。「アルコール消毒のボトルが押しにくい」「認知症の人がマスクを着用できない」といった声のほか、「高齢者が声を出していない環境を作りたい」「看護師が管理する薬の1回の量が多い」などの意見も寄せられた。病院の環境や設備など、看護・ケア現場での具体的な困りごとも浮き彫りになった。例えば、乾燥を防ぐために病院内で加湿器を使用しているが、使用にあたっては「洗浄乾燥の手間がかかる」「加湿器が10台もある」といった声もある。

また、洗面台について「清潔を保つために手を洗えば洗うほど洗面台が汚れる」という声も聞かれ、消毒ボトルが押しにくいという声も寄せられた。調査をまとめた同大実践教育センターの松永早苗准教授は「現場の看護師なら共感できる意見。ただ、いわば愚痴みたいなもの」と認識され、あまり表に出てこなかった」と話す。

こうした課題を企業などに伝えて、解決策を探ろうとしているのが川崎市だ。愚痴に終わらせず、具体的な課題としてまとめた上で、問題を広く知ってもらう場を作ろうとしている。

間島哲也・市連携推進担当課長は「例えば商工会議所や市産業振興財団など既存の場の利用や、ウェアなどを使ってケア現場の課題を企業に伝える場を増やしたい」と話す。

問題解決には企業の技術やノウハウが必要になる。「消毒ボトルを使いやすくするためにはどうしたらよいか」「洗浄しやすい加湿器ができないか」といった機器の改善や、「認知症の人の薬管理をどうするか」というシステム構築など、幅広い分野の企業からアイデアをもらい、解決に導く道筋をつけていく。間島課長は「今回の調査を現場と企業をつなぐ最初の一步にした」と話している。(斎藤博美)